

# 日本出土の南宋越州窯青瓷

## —博多遺跡の青瓷香炉—

森 達也

越州窯青瓷の生産は北宋末に停止したと、かつては考えられていたが、1990年代に上林湖の西方に位置する低嶺頭窯や寺龍口窯で、三代青銅礼器の器形を模倣した製品や粉青色青瓷が発見され、その生産は南宋前期まで続いていたことが明らかとなった<sup>1</sup>。

南宋越州窯の製品は、北宋後期の越州窯青瓷の器形や紋様の系譜を引き継ぐタイプ（図1）と、倣三代青銅礼器などの南宋初期に新たに生み出された器形のタイプ（図2）とに分けられる。後者の一部には汝窯青瓷の影響を受けたと思われる粉青色の製品が見られ、南宋初期の紹興元年（1131）と四年（1134）に宋朝が越州と紹興府余姚県に礼器の生産を命じたとする『中興礼書』などの記録<sup>2</sup>に符合すると考えられている<sup>3</sup>。

南宋越州窯青瓷は、南宋の都であった臨安（杭州）<sup>4</sup>や寧波<sup>5</sup>で発見されているが、三代青銅礼器の器形を模倣した製品や粉青色青瓷は南宋朝の御用品として生産されたと考えられているため、海外への輸出についてはこれまでまったく考察されたことがない。しかし、最近、日本の博多遺跡でその出土が確認されたため、海外で発見された南宋越州窯青瓷の稀有な例として紹介し、その流通について考えてみたい。

### 1. 博多遺跡出土の青瓷香炉

博多は、11世紀頃から17世紀初頭まで日本の海外交流の窓口として栄えた港湾都市で、1977年に開始された発掘調査によって9世紀から17世紀にかけての中国瓷器が大量に出土している（図3）<sup>6</sup>。

ここで紹介する南宋越州窯の青瓷香炉は（図4・5）、博多遺跡群の東部に位置する第99次調査地点のSK045（45号土壙墓）で出土した<sup>7</sup>。口縁部が盤口で、底部に三足が付く鼎形の香炉であるが、足は全て欠損している。胴部は3つの文様帯に区分され、上部には縦方向の条線刻紋が巡り、中段には獅子の貼花紋とその周りに粗い彫りの刻花葉紋、下部には刻花

連弁紋が施されている。足は全て欠損しているが、痕跡が残っており、付け根の部分の形態はく形となっていたことがわかる。底部の下面と内面にはリング状の目跡が残っている。釉は淡緑色で、総釉であるが、釉層は薄い。胎土は淡灰色である。推定口径は 12.2 cm、残高は 8.1 cm である。

まったく同じ器形、紋様の香炉が、寺龍口窯址から出土している（図 6・7）。<sup>8</sup>紋様、器形はほぼ同じで、口径 11.8 cm、残高 9 cm と大きさもほぼ一致する。リング状の目跡の形状も同じである。同じような貼花獅子紋を持つが、紋様構成がやや異なる同形の香炉（図 8）も複数出土しており<sup>9</sup>、貼花獅子紋が施された香炉は南宋の寺龍口窯ではかなり一般的であったと考えることができる。

寺龍口窯址出土品との比較から、博多遺跡群第 99 次調査地点出土青瓷香炉は、南宋越州窯の製品と断定することができる。報告書では、この香炉の年代を北宋前半期と推定しているが、同じ遺構（SK045）からは、福建の白瓷碗や皿、龍泉窯青瓷の碗、皿、福建の青瓷碗、皿（いわゆる同安窯系青瓷）、景德鎮窯青白瓷碗、香炉、日本産の無釉陶器などが出土しており、報告者はこれらの遺物から、この土壙墓の年代を 12 世紀中頃から後半と推定している。共伴する龍泉窯青瓷碗は、外面は無紋、内面には劃花紋をもつもので（図 9）、広東沿海で発見された南海 1 号沈船<sup>10</sup>や日本の奄美大島・倉木崎海底遺跡<sup>11</sup>発見の龍泉窯青瓷碗とほぼ同形である。このタイプの青瓷碗の生産年代は博多遺跡や大宰府遺跡では 12 世紀後半と想定されていたが<sup>12</sup>、西沙諸島で発見された華光礁 1 号沈船から「壬午」（1162 年）銘の青瓷が引き上げられた<sup>13</sup>ことによってこの年代観を若干修正する必要が生じている。華光礁 1 号沈船から引き上げられた龍泉窯青瓷碗は、外面に櫛目紋をもつタイプ（図 10）が主で、南海 1 号沈船の外面無紋の青瓷碗（図 11）より一段階古い様相を示す<sup>14</sup>。華光礁 1 号沈船が 1162 年もしくはその少し後の沈没年代であるとするれば、南海 1 号沈船は、それよりも一段階後の 12 世紀第 4 四半期から 13 世紀初頭頃に位置づけられ、龍泉窯の外面無紋の青瓷碗の年代もその頃の年代が想定される。主にこのタイプの青瓷碗が出土する、この土壙墓（SK045）の年代もほぼこの頃と考えてよいであろう。

南宋越州窯の生産年代は南宋初期と想定されており、この土壙墓の年代とは半世紀ほどの差がある。博多出土南宋越州窯青瓷香炉は、前述したように三足が全て欠損しているが、足の付け根は、丁寧に削り落したように見える。おそらく、三足のうちのどれかが欠損してしまったために、他の二足も打ち欠いて平底にして使用を続けたもので、ある程度の使用期間、伝世期間を経て廃棄されたと考えることができるのである。足の破損後に、すぐに廃棄されることなく、しばらくの間使用されたことから見て、日用雑器のように粗略に扱われたものではなかったのであろう。

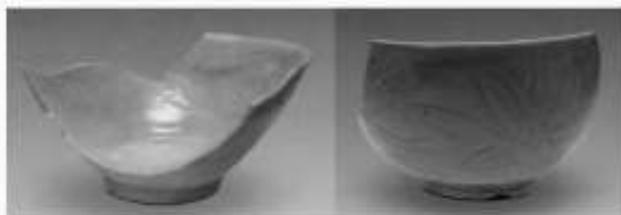


図1 南宋越州窯 寺籠口窯址出土 脚注8文献より



図2 南宋越州窯（倣三代青銅礼器）  
寺籠口窯址出土 脚注8文献より

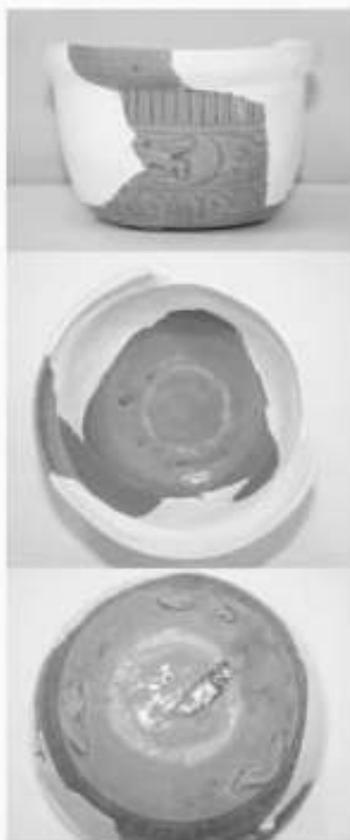


図4 南宋越州窯青瓷香炉  
博多99次SK045出土  
筆者撮影

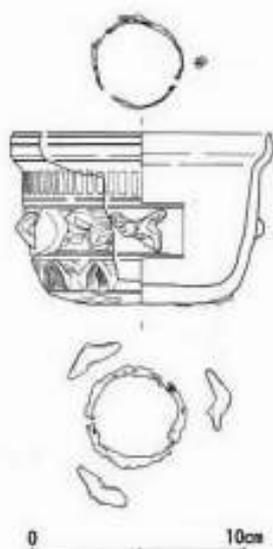


図5 南宋越州窯青瓷香炉  
博多99次SK045出土  
脚注7文献より



図6 南宋越州窯青瓷香炉  
寺籠口窯址出土  
脚注8文献より

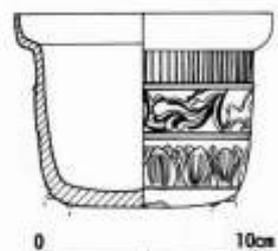


図7 南宋越州窯青瓷香炉  
寺籠口窯址出土  
脚注8文献より



図8 南宋越州窯青瓷香炉  
寺籠口窯址出土  
脚注8文献より



図3 博多遺跡群位置図

## 2. 博多における越窯青瓷の出土状況

日本では8世紀末頃から越州窯青瓷の輸入が始まり、博多湾一帯がその最大の受け入れ窓口となった。晩唐・五代の越州窯青瓷が数多く出土するのは、博多遺跡群と入り江を挟んで向かいあう鴻臚館遺跡（当時の外交施設）やもっと内陸部の大宰府遺跡（当時の九州地方を管轄した政庁跡）などで、博多遺跡群では晩唐・五代の越州窯青瓷の出土数はそれほど多くない。11世紀になると博多の港湾都市としての機能が高まり、劃花文が施された北宋代の越州窯青瓷の出土例がある程度見られるようになる。数は少ないが、北宋後期の越州窯青瓷もある程度出土しており（図12）、晩唐・五代から北宋末期まで、博多に継続的に越州窯青瓷がもたらされていたことがわかる。一方、南宋越州窯青瓷の出土例は現時点で管見に触れたのは、この青瓷香炉のみであることから、越州窯青瓷の輸入は北宋末期に基本的には停止し、この南宋越州窯の香炉は、極めて例外的なものと考えられる。それでは、この南宋越州窯の青瓷香炉はどのようにして博多遺跡に運ばれたのであろうか？次節ではこの問題について考えてみたい。

## 3. 南宋越窯青瓷の生産と流通

南宋越州窯青瓷の中国国内での出土は、前述したように杭州と寧波に集中しており、浙江省北部以外の地域ではほとんど確認されていない。越州窯青瓷の生産は、北宋末期で終了したと近年まで考えられていたことからみても、南宋越州窯青瓷の生産量は、北宋の越州窯青瓷よりも遥かに少なかったと推定できる。その流通範囲も北宋の越州窯が中国国内はもとより、東アジアから東アフリカにわたる極めて広い地域に運ばれたのに比べて、浙江北部という極めて狭い地域に限定されていた。

靖康二年（1127年）に宋王朝（北宋）が金によって滅ぼされた直後に、高宗によって南京（今の河南省商丘）で再興された宋朝（南宋）は、建炎三年（1129）に金軍に追われて南渡した。同年に行宮が杭州に置かれて杭州府は臨安府と改称されたが、間もなく金軍の追撃によって杭州を追われ、江南各地を転々としたのち、紹興2年（1132）には再び杭州に戻った。紹興8年（1138）には杭州に正式な遷都が行われ、紹興十一年（1141）に金との講和が正式に結ばれて、南宋朝はやっと安定期を迎えたのである。

南宋越州窯の生産は、混乱状態にあった南宋初期の段階で行われたのであり、その製品の流通範囲が南宋朝の拠点であった浙江北部に限定されているのも、この混乱期の状況を反映していると考えられる。紹興十一年（1141）に金との講和が正式に結ばれて、南宋朝が安定

期に入ると、南宋越州窯の御用品生産の機能は、杭州に設けられた官窯に引き継がれ、民間用の青瓷生産の拠点は龍泉窯に移って、南宋越州窯には終止符が打たれたのである。

南宋越州窯の製品は流通範囲が極めて狭く、生産がおこなわれた南宋初期の状況から見て、国外に本格的に輸出されたとは考えられないが、それでは、どのような経緯によって博多出土の南宋越州窯青瓷香炉は日本に運ばれたのであろうか。

唐・宋・元に日中交流の中国側の窓口は、基本的には寧波であった。榎本渉が作成した『対日交通に利用された中国側港湾（800-1349年）』のリスト<sup>15</sup>によると、記録に残る中国を発した日本向け船舶53例の内、過半を占める37例が明州（寧波）発で、日本から中国に向かった船68例のうち、37例が明州（寧波）に、3例が杭州に入港しており、浙江北部が日本と密接な関係にあったことがわかる。

宋代に日中間の貿易を担ったのは、主に中国商人であった。中国を拠点として日中貿易にかかわった商人のほか、博多に拠点を置いた中国商人も少なくなく、「博多綱首」と呼ばれて、大宰府や博多周辺の寺社や有力者（権門）と結びついて博多から寧波に渡って盛んに貿易活動をおこなった<sup>16</sup>。日本人で中国に赴いたのは主に仏僧で、やはり博多から寧波のルートを通る場合が多かった。

こうした当時の状況から見て、博多出土の南宋越州窯青瓷香炉は、当時日中間を往来した商人（中国商人または博多綱首）か、日本人の仏僧によって日本に運ばれた可能性が高いと考えられる。博多遺跡で発見される南宋初期の中国瓷器は、圧倒的多数が福建北部の閩江流域で生産された白瓷と、広東省北部の潮州窯の白瓷で、他に龍泉窯青瓷や景德鎮窯青白瓷、閩江下流域の黒釉碗（天目碗）などが少量あるという組成である<sup>17</sup>。こうした、ある程度まとまった量が出土する中国瓷器は、商人によって貿易商品として運ばれたと考えられる。しかし、南宋越州窯青瓷香炉のようにわずかに1点しか発見されていないものは、たとえ商人によって運ばれたものであったとしても、通常の商品とは同列には論じられない。

前述したように、南宋越州窯の製品は、北宋後期の越州窯青瓷の器形や紋様の系譜を引き継ぐグループ（図1）と、倣三代青銅礼器などの南宋初期に新たに生み出された器種のグループ（図2）とに分けられるが、博多出土の南宋越州窯青瓷は、後者のグループに属し、南宋朝の御用品として生産された可能性もある。こうした製品が商人の手を経て日本にもたらされたとすると、ごく少量だけ入手できた特別な商品、または、他者から贈呈された礼品や記念品、自ら使用するための什器、日本での贈呈用の品などさまざまな可能性が推定できる。僧侶によって運ばれたとすると、他者から贈呈品、自らが使用するための什器、帰国後の贈呈用品、帰国後に寺院などで使うための品などの可能性がある。いずれにしても、通常の商品とは一線を画した位置づけをもった特別な扱いを受けた器物であった可能性が高いの

である。

おわりに

以上のように、博多出土の南宋越州窯青瓷は、通常の貿易商品として日本に運ばれた器物ではなく、おそらく南宋朝の御用品として生産されたものが何らかの理由で、商人または僧侶によって日本に運ばれたと考えられる。

ところで、南宋越州窯と前後した時期に、宮廷用の御用品として生産された汝窯（北宋末期）や南宋官窯の青瓷は、海外の遺跡などで出土した例はまったくない。汝窯は、最上品は宮廷に納められ、次品は民間での売買が認められたとされるが<sup>18</sup>、民間にあるものが皇室に献上されるなど<sup>19</sup>、南宋代以降には極めて貴重品として扱われた。また、南宋官窯では、民間に流出することを防ぐために不良品が粉々に砕かれて土坑に一括廃棄されるなど、厳密な管理が行われていた。一方、南宋越州窯青瓷は、博多出土品のように海外に渡ったものもあることから、汝窯や南宋官窯のように大変な貴重品として扱われて、厳密に管理されていたとは思われないのである。

南宋越州窯の倣青銅礼器の生産は、南宋初期の混乱状況の中で、青銅礼器の不足を補うために、朝廷によって命じられたと考えられるが、その製品は汝窯や南宋官窯に比べて完成度が低く、生産も短期間で終了している。宋代の文献にも「汝窯」「官窯」の名は記載があるが、「南宋越州窯」に相当する窯の名は記録に残されておらず、歴史に残る名窯としての位置は与えられなかったのである。その生産は南宋初期の混乱期に行われた暫定的なもので、製品の扱いや管理も汝窯や南宋官窯のように厳密ではなかったため、日本へ運ばれるという状況が生じ得たのであろう。

本稿で紹介した博多出土の南宋越州窯青瓷は、現在、福岡市埋蔵文化財センターで保管されている。この場を借りて、調査を許可していただいた福岡市埋蔵文化財センターと御協力いただいた田上勇一郎氏に謝意を表したい。

（本稿は、《森達也「日本出土的南宋越窯青瓷－博多遺跡的青瓷香炉」『故宮文物 月刊』332号、国立故宮博物院（台湾）、2010年11月》の日本語版である）

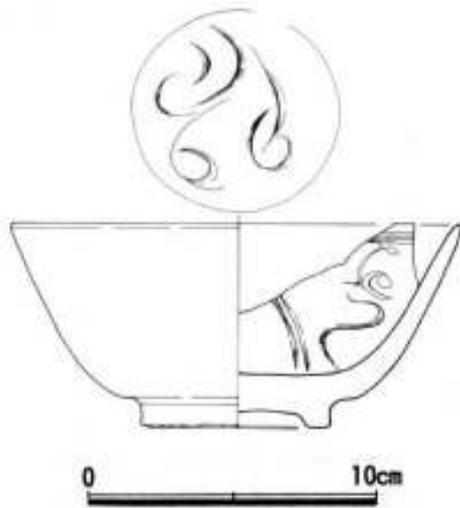


図9 龍泉窯青瓷碗  
博多99次SK045出土  
脚注7文献より



図10 龍泉窯青瓷碗 華光雜1号沈船  
『西沙水下考古1998~1999』科学出版社, 2006年より



図11 龍泉窯青瓷碗  
南海1号沈船  
脚注10の文献より

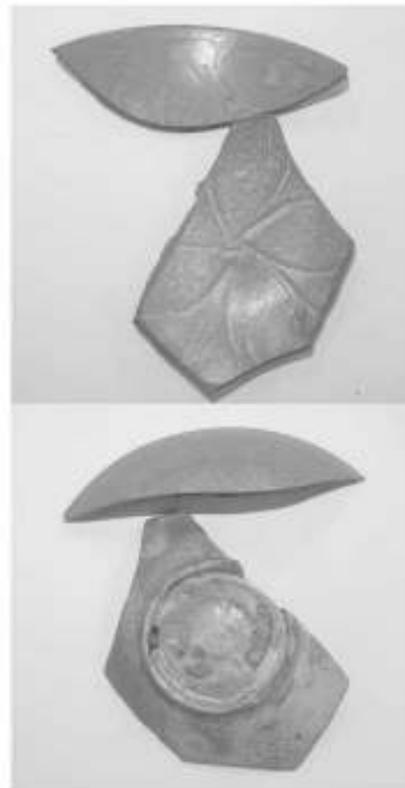


図12 越州窯青瓷碗  
北宋末期 博多56次出土  
福岡市埋蔵文化財センター  
一保管 筆者撮影

- 
- <sup>1</sup> 沈岳明「修内司窯の考古学観察-從低岭頭談起」『中国古陶瓷研究』4期,紫禁城出版社,1997年,84~92頁。  
浙江省文物考古研究所、北京大学考古文博学院、慈溪市文物管理委员会『寺龍口越窯址』文物出版社,2002年。
- <sup>2</sup> 『中興礼書』卷五十九「明堂祭器」記載：“(紹興元年)四月三日…祀天并配位用匏爵陶器,乞令太常寺具教下越州制造,仍乞依見今竹木祭器様制燒造。”(『統修四庫全書』影印北京図書館藏清蒋氏宝彝堂鈔本,上海古籍出版社,1998年,822冊,242頁)。
- 『中興礼書』卷五十九「明堂祭器」記載：“(紹興四年四月二十七日)同日工部言,据太常寺申,契勘今來明堂大礼正配四位合用陶器,已降指揮下紹興府余姚縣燒造”(『統修四庫全書』本,822冊,243頁)。
- <sup>3</sup> 浙江省文物考古研究所、北京大学考古文博学院、慈溪市文物管理委员会『寺龍口越窯址』文物出版社,2002年,見372頁。
- <sup>4</sup> 金志偉「“御厨”字款越瓷再探」『故宮博物院 院刊』2001年第1期,79~83頁。  
金志偉、胡雲法、金軍「南宋宮廷所用越瓷的幾個問題」『浙江省文物考古研究所 學刊』第5輯,2002年,72~77頁。
- <sup>5</sup> 朱勇偉、陳鋼『寧波古陶瓷拾遺』,寧波出版社,2007年,見63~66頁。ただし、この文献で取り上げられている資料は、正式な調査や発掘によるものではないため、学術的資料として用いるのにはやや問題があり、注意が必要である。
- <sup>6</sup> 田中克子「貿易陶磁の推移 中国陶磁」『中世都市 博多を掘る』海鳥社,2008,112~128頁。
- <sup>7</sup> 『博多市埋蔵文化財調査報告書第560集 博多65-博多遺跡群第99次・第101次調査報告-』福岡市教育委員会,1998年,40頁,第37図-448。
- <sup>8</sup> 浙江省文物考古研究所、北京大学考古文博学院、慈溪市文物管理委员会『寺龍口越窯址』文物出版社,2002年,222頁,図125-8、223頁,彩図302。
- <sup>9</sup> 浙江省文物考古研究所、北京大学考古文博学院、慈溪市文物管理委员会『寺龍口越窯址』文物出版社,2002年,222頁,図125-9、10、12、13、223頁,彩図303、224頁,彩図304、305。
- <sup>10</sup> 『はるかなる陶磁の海路展-アジアの大航海時代』,朝日新聞社,1993年。
- <sup>11</sup> 『鹿児島県大島郡宇検村 倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』,宇検村教育委員,1999年。
- <sup>12</sup> 森田勉、横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4,1978年,1~26頁,見25頁。  
田中克子「貿易陶磁の推移 中国陶磁」『中世都市 博多を掘る』海鳥社,2008,112~128頁,見117頁。
- <sup>13</sup> 中国国家博物館水下考古研究中心『西沙水下考古1998~1999』,科学出版社,2006年。  
張威「西沙群島華光礁1号沈船遺址 救性発掘」『2007中国重要考古發現』,文物出版社,2008年,173~176頁,見174頁。
- <sup>14</sup> 亀井明德「草創期竜泉窯青磁の映像」『東洋陶磁』VOL.19,1992年,5~27頁。
- <sup>15</sup> 榎本渉「表1 対日交通に利用された中国側港湾(800-1349年)」『東アジア海域と日中交流-九~一四世紀-』吉川弘文館 p30-39 2007年。
- <sup>16</sup> 榎本渉「日宋・日元貿易」『中世都市 博多を掘る』海鳥社,2008,70~81頁。
- <sup>17</sup> 田中克子「貿易陶磁の推移 中国陶磁」『中世都市 博多を掘る』海鳥社,2008,112~128頁,見113~117頁。
- <sup>18</sup> 宋・周惲『清波雜誌』「汝窯宮中禁燒、内瑤瑤未為油、唯供御揀退方許出売,近尤難得。」
- <sup>19</sup> 宋・周蜜の『武林旧事』には、紹興二十一年(1151)に高宗の寵臣であった張俊が16点の汝窯を皇帝(高宗)に献上したという記載がある。